



行く年を忘れる忘れぬどちらでも

上山美穂

この一年のあれこれは忘れてしまいたい。しかし、忘れたくない事もある。結論としては「どうせ行く年だ。もうどちらでもいいか」ということに。



葉牡丹は花になることあきらめず

日根野聖子

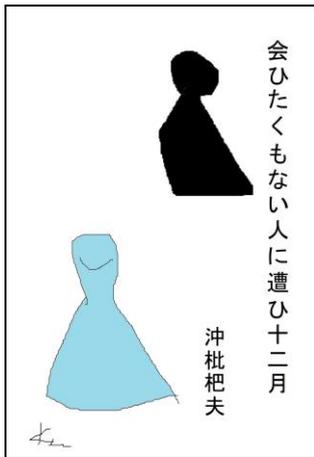
葉牡丹には花になりきれていないという劣等感がある。自身の運命だからといくたび思ったことか。いつか花になるのだという健気な決意がある。



折鶴を折れば飛びたくなつて来し

糸賀幸剣

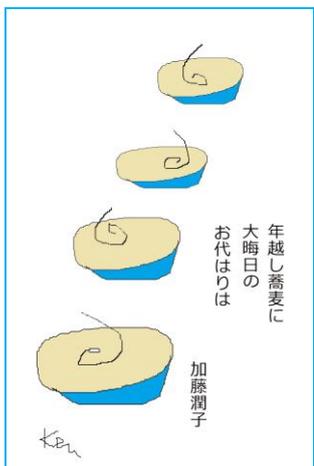
折紙の巧みな人の手にかかると、今にも飛び立ちそうな躍動感が出る。折鶴の気持ちを擬人化したとも読めるし、作者の気持ちとも読める。



会ひたくもない人に遭ひ十二月

沖枇杷夫

正直言って会いたい人と会いたくない人はいる。よりによって、一年の締めくくりの十二月に出くわすとは。「一月は会ひたき人に逢ひに行く」。



年越し蕎麦に大晦日のお代はりは

加藤潤子

大晦日に蕎麦を食べたらうまかった。お代わりをして、食べ終わったら新年になっていたという楽しい句である。本当の年越し蕎麦ですね。



太き枝ばつさり伐つて十二月

桜井美千

新年を迎えるにあたって、不要なものは思い切って処分しよう。枝も、持ち物も、決心のつかなかったあれこれも。大きく捨てれば大きく入ってくる。